

岐阜県の冬季観光産業（スキー場）の実態調査報告

（財）岐阜県産業経済振興センター

主任研究員 松山 亨

岐阜県の冬季観光産業（スキー場）の実態調査報告

1. はじめに	43
2. 調査方法	43
3. 岐阜県のスキー場の歴史	45
4. 東海北陸自動車道の延長とスキー場に対する影響	46
(1) 概況	46
(2) 各地域の動向	46
(3) その他集客に関する分析	49
(4) 市場としての関東圏の捉え方	50
5. ウィンタースポーツ人口自体の減少傾向について	51
6. スノーボーダーの増加とウィンタースポーツの多様化	53
(1) スキーヤーとスノーボーダーの割合	53
(2) カービングスキー、ファンスキーの登場でスキーヤーの割合減少に歯止め	54
(3) 多様なウィンタースポーツ・リゾートへの取組	55
7. 地域社会との関係	56
(1) 第3セクター・市長村営のスキー場と地元住民の雇用	56
(2) 町村の観光の目玉	56
(3) 冬季期間の生活道路の渋滞	56
8. 労働力であり顧客であるフリーターという存在について	57
(1) 期間労働力の担い手	57
(2) 主要なマーケット層	57
9. 今後の課題	59
(1) 新しい消費者志向、消費構造の変化にどう対応するか	59
(2) 「スキー場群」としての集客をいかに図るか	59
(3) 渋滞緩和をいかに図るか	55
10. 今後の展開	60
(1) 携帯電話掲示サイトでスキー場情報を発信	60
(2) 携帯電話情報サイト構築のための可能性	60
(3) スキー場の差別化	61
(4) 県側から岐阜県のイメージアップ手段としての後押し	62
(5) 東海北陸自動車道の早期4車線化	62
(6) 連絡道路他の整備	64
11. アンケート分析結果	65
(1) オープン時期	65
(2) クローズ時期	65
(3) 圧雪車1台あたりの滑走面積（ha/台）	66
(4) リフト券のICカード化状況	66
(5) リフト券に入場者保険料を含む割合	67
(6) スノーボードのレンタルコーナーでの設置状況	67
(7) スノーボード用コース設定状況	67
(8) スキー場利用に伴い利用を勧める施設	68
(9) シーズンオフの利用方法	68
県内冬季観光産業（スキー場）実態調査アンケート	69
参考文献	75

岐阜県の冬季観光産業（スキー場）の実態調査報告

1. はじめに

東に飛騨山脈・木曽山脈、西に両白山地・伊吹山地を有する他、山河に恵まれた岐阜県ではスキー場を中心とした冬季観光産業が盛んであり、全国有数の豊かな水と緑に恵まれた県である岐阜県の重要な一面である。隣県：長野の知名度に押され気味であることは歪めないものの、最近になってオープンしたスキー場もあり、岐阜県にとって重要な観光産業であることには違いない。

今回の研究では、各県内スキー場施設の管理部内・事務局、および観光協会等を訪問し、岐阜県の冬季観光産業：スキー場産業の現状を分析し、景気の低迷、ウインタースポーツ人口が現象するといった背景を踏まえつつ、その課題を明らかにし、今後の展望を考える。

また、今年度は東海北陸自動車道の延長により飛騨清見インターチェンジが開設後、初めてのスキーシーズンであり、これが業績にいかに関与しているか興味のあるところであり、これについても検討することとした。

2. 調査方法

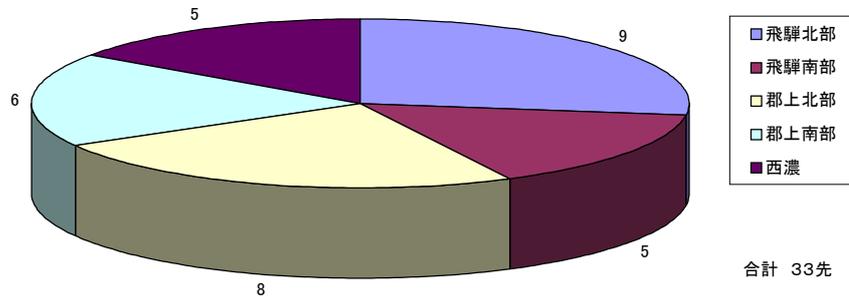
県内28のスキー場に対して事前に調査する項目についてアンケート用紙を配布し、その後、当センター調査員が、各スキー場広報担当者を訪問し、上記アンケートに沿って聞き取りを行った。

その他、県内10のスキー場に対してはアンケート用紙の配布、郵送による回収のみを行い、意見集約を行った。

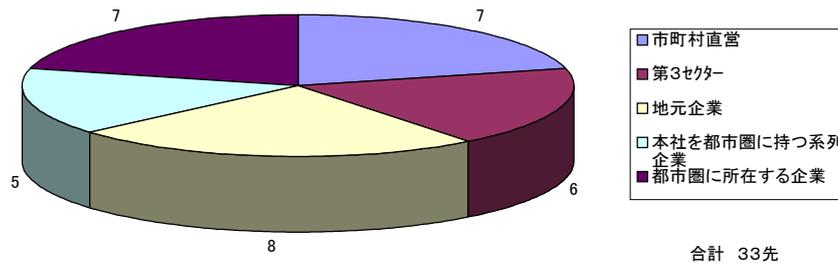
なお、この他2つの観光協会地元大手観光バス会社、スキー場の連絡機関をそれぞれ一箇所訪問し、各スキー場から聴取した意見について、別の角度から検証することとした。（アンケート用紙については本章の末に掲載）

調査対象先の分類

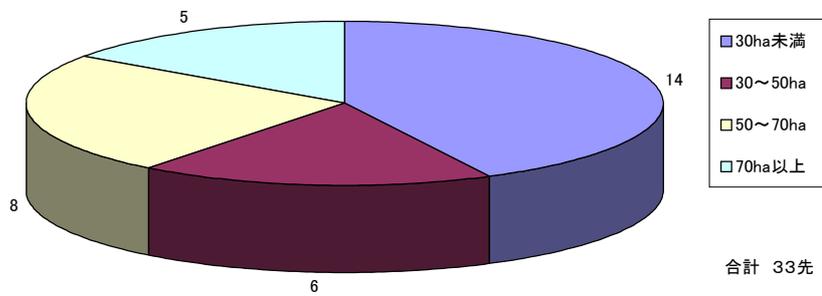
調査対象先地域別分類



調査対象先経営母体別分類



調査対象先面積別分類



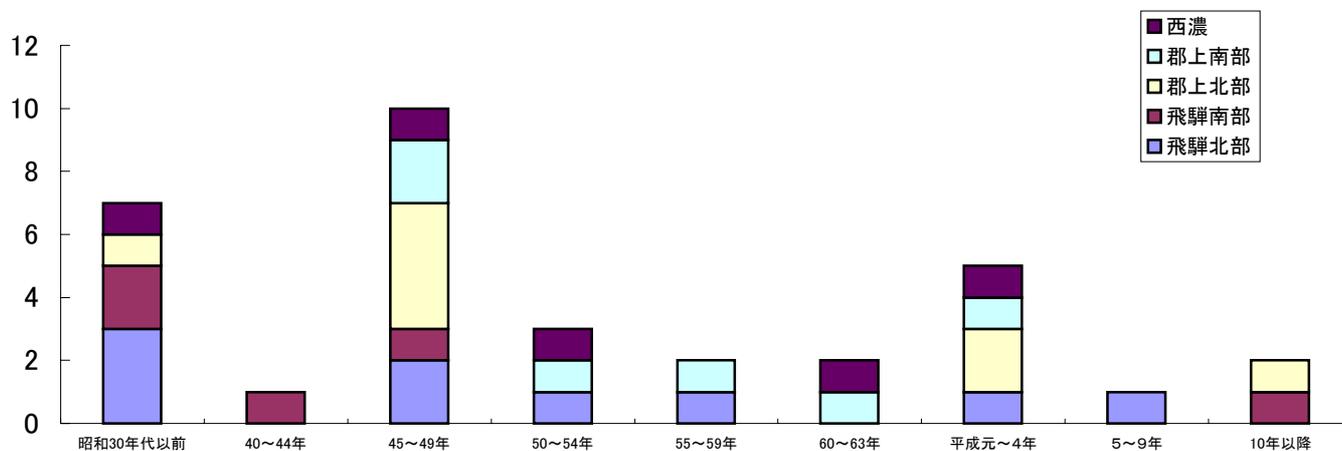
3. 岐阜県のスキー場の歴史

岐阜県スキー連盟編「四十年史」、(財)岐阜県体育協会発行「岐阜県体育協会50年誌」によれば、戦前から十数のスキー場が県内にあり、昭和31年に東海・北陸地区で最初のリフトが、高山市の原山スキー場において設置された。以降昭和30年代後半より昭和40年代までには殆どのスキー場にリフトの設置されていった。

そうした中、昭和44年に神岡町の流葉において国民体育大会冬季大会が開催され、スキー県としての評価が急速に高まった。昭和50年代～60年代において設備も近代化が進み、飛騨地区において、各種全国大会が開催されるようになり、平成8年には朝日村の鈴蘭高原スキー場において再度国体が開催されることとなった。

平成の初頭においては、好景気とあいまってスキーブームが到来し、県内各地域で大型スキー場の計画が相次いだ。また、東海北陸自動車の延長により関西圏のスキーヤーの日帰り圏となったことで、入り込みスキーヤーの変化がおり、大型スキー場のオープンも重なったことで、知名度の点では、郡上郡のスキー場が岐阜県のスキー場の中心になっていった。

年代別スキー場開設状況



4. 東海北陸自動車道の延長とスキー場に対する影響

(1) 概況

一宮ジャンクションにおける名神高速道路との連絡、郡上郡内では白鳥ＩＣが平成9年11月に、高鷲ＩＣが平成11年11月に開設され、郡上郡のスキー場は関西圏から日帰りできるエリアとなった。また、同時期に大型施設が誕生し、郡上地域は集客を増やした。しかし同時に同地域のスキー場関係者によれば、シーズン中の高速道路の渋滞は、スキーヤーに悪い印象を残すものとなったと言われている。従来より国道156号や、それに接続する連絡道路の渋滞については、スキーヤーばかりでなく、生活道路を封鎖される地元民にとっても大きな問題である。

現在でも、東海北陸自動車道・国道41号の渋滞を考え、関西方面からの来場者に対しては北陸自動車道を勧めているスキー場もある。その理由は、このルートに関西からのアクセスとして使用した場合、例え事故あるいは気象状況の悪化により、高速道路の使用が困難となった場合でも国道8号の通行で代替できるからである。現在は、東海北陸自動車道と平行して走る国道156号も、スキーシーズンは渋滞しているのが常である。

今後さらに、中部縦貫自動車道が延長され、清見東ＩＣ、高山ＩＣ、丹生川ＩＣが開設されても、その恩恵が飛騨地区のスキー場には享受されないというのが、飛騨のスキー場関係者の一般的な考え方である。それは飛騨エリアへ行く途中に郡上郡のエリアがある限り、高速道路料金との兼ね合いもあって、アクセスの向上が即、集客力の向上にはならないと考えられているからである。

さらに、東海北陸自動車道が富山県側と貫通した場合においても、北陸方面から、飛騨地域を訪れていたスキー客が一層奥美濃のスキー場へとながれるのではないかとこのことを、飛騨地域のスキー場では懸念している。

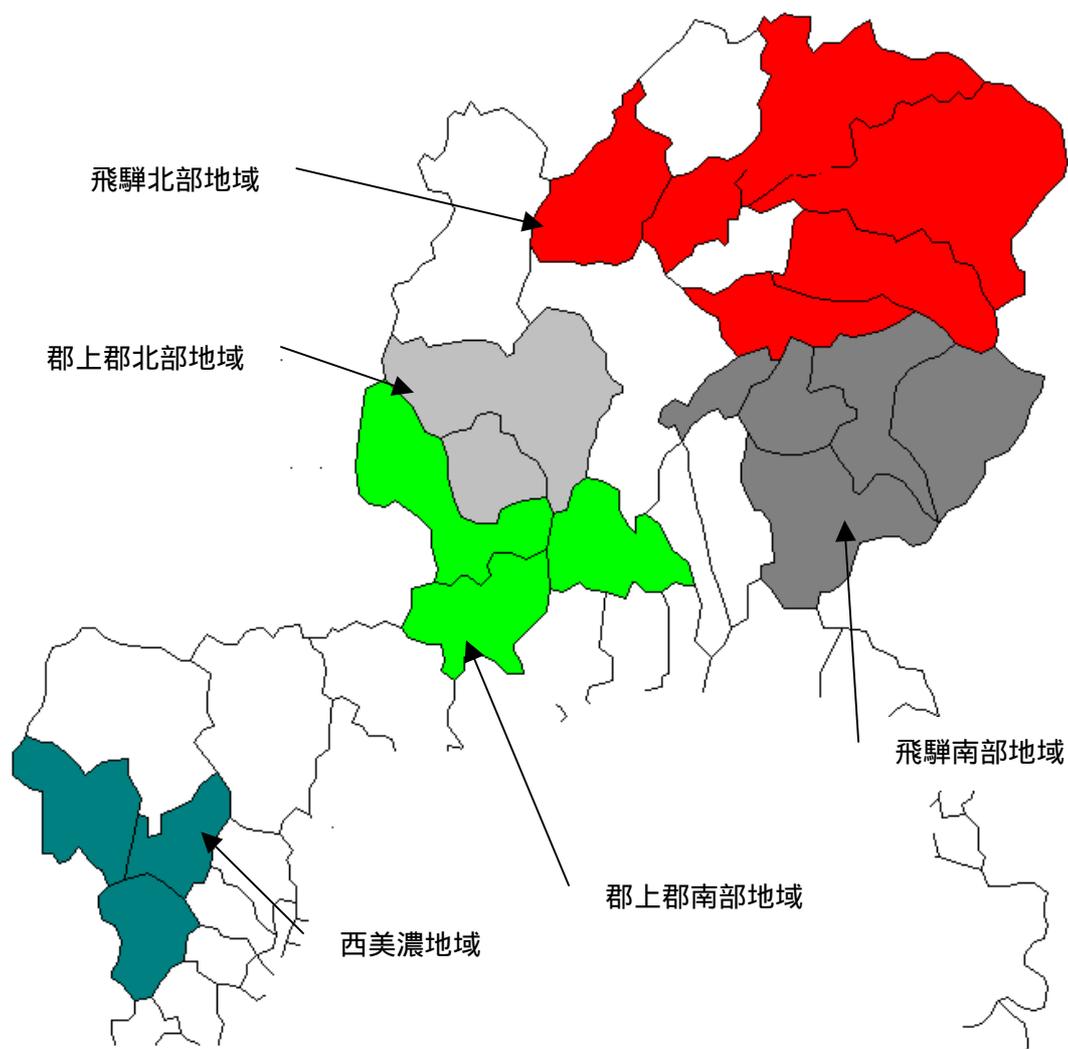
逆に奥美濃のスキー場については、北陸方面のスキー客を当て込むほか、中部縦貫道が白鳥西ＩＣ以西にさらに延長され、福井方面とのアクセスがさらに進んだ場合、関西方面の客をも取り込むことができるのではないかと期待している。

(2) 各地域の最近の傾向

本調査では、以下のように岐阜県内スキー場を地域分けしている。

	区分	市町村名
飛騨北部	高山市以北の施設	高山市、吉城郡丹生川村、上宝村、神岡町、古川町、河合村
飛騨南部	大野郡宮村以南の施設	大野郡高根村、朝日村、宮村、久々野町、益田郡小坂町
郡上郡北部	高鷲村以北の施設	郡上郡高鷲村、大野郡荘川村
郡上郡南部	白鳥町以南の施設	郡上郡白鳥町、大和町、明宝村
西美濃	揖斐郡内の施設	揖斐郡坂内村、久瀬村、春日村

本報告での地域分け



以下各地域と高速道路の延長との関係について記載する。

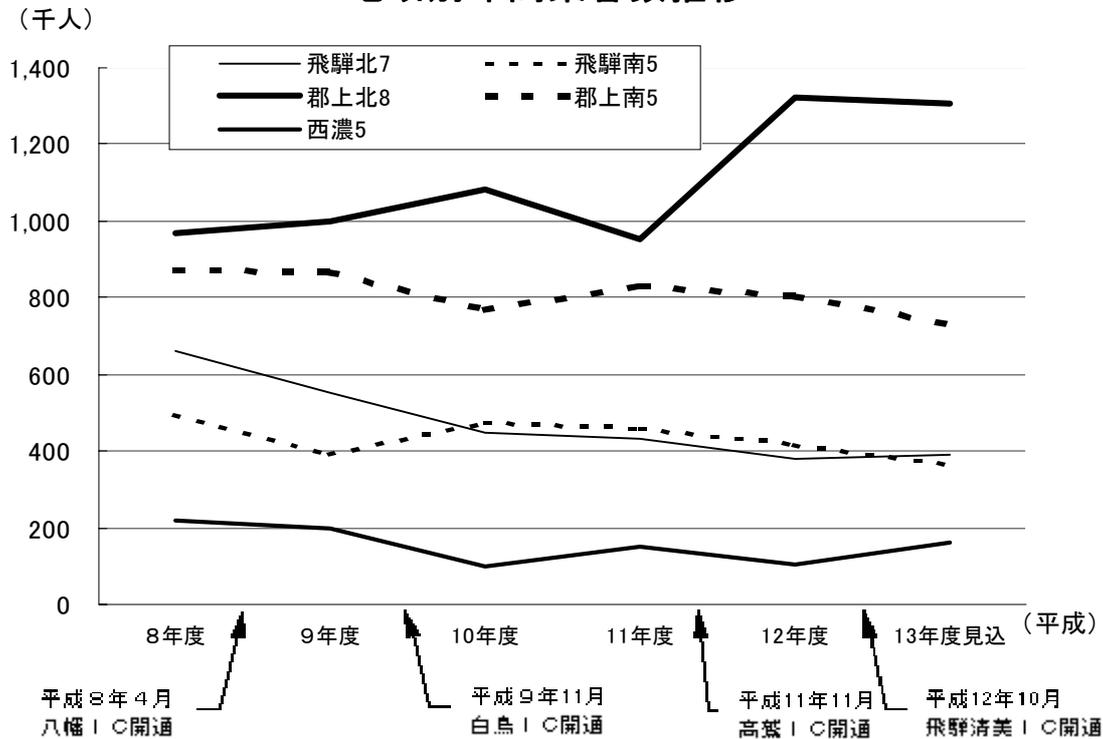
飛騨北部地区

かつては岐阜県のスキー場の中心的役割を果たしてきた地区であるが、暖冬が続いたこともあって、郡上郡南北地区の興隆に押されている。飛騨清見ICの開通が今年の集客増につながったか否かについては、今年は積雪に恵まれたこともあって、微妙である。今後は、中部縦貫道の延長による中京圏からの集客増よりも、東海北陸自動車道の完成により北陸圏の顧客を奥美濃の施設に奪われることを各スキー場は懸念していた。

飛騨南部地区

東海北陸道の沿線から最も遠いことに加え、最近の暖冬傾向もあって、ここ数年は集

地域別年間集客数推移



客を徐々に落としている。ただし、今年は積雪に恵まれ、また郡上郡のスキー場への行き帰りの道路の渋滞に嫌気がさした利用者もあったためか、昨年比で入り込み客数の落ち込みに歯止めがかかった施設もある。

郡上郡北部（荘川村を含む）

東海北陸道の延長により最も恩恵をうけた地域であろう。大型施設も加わり、中京圏・関西圏から長野方面に向かっていったスキーヤーも取り込み集客を増加させている。

名古屋の大手バス旅行業者によれば、同社のスキーツアー利用者全体に占める長野方面への利用者の割合と岐阜県方面への利用者の割合は、平成11年度は前者74%、後者10%であったものが、高鷲ICが開通した平成12年度は前者70%、後者19%、さらに本年度は前者65%、後者25%と見込んでいる。

なお、今後中部縦貫道が県内を貫こうとも、中京圏・関西圏の利用者が飛驒地域に流れることはなく、結局は同地区内のICで下車し同地域を利用するものと各スキー場とも自信をもっている。さらに東海北陸自動車道の貫通がなれば、北陸圏をもマーケット視野に入れようと計画している。

郡上郡南部（白鳥村以南）

白鳥IC開通までは、安定した集客を保ってきたが、高鷲ICの開設とともに集客を落としている。各スキー場共に高速道路のインターチェンジから遠いことがネックとなっている。

西濃地区

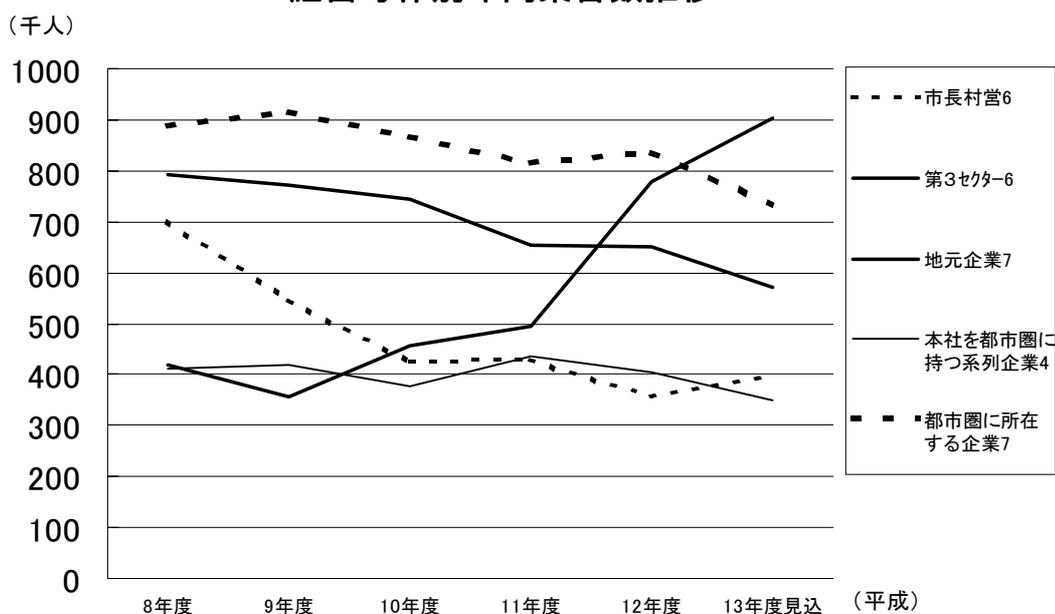
元々、小規模なスキー場の点在する地域で、入り込み客の絶対数は少ないが、特に昨年は極端な雪不足で、入り込み客を落とした。今年は積雪に恵まれ、またドライバーが奥美濃の渋滞に嫌気がさしたせいか、集客を戻している。現状では大垣ICからも近く中京・関西圏からの利用者を集めているが、西濃のスキー場関係者は、いよいよ景気が回復して、さらに東海北陸自動車道が、4車線化したなら、高速道路利用者が増え、さらに集客を減少させるのではないかと心配している。

(3) その他集客に関する分析

この他、経営母体別及び面積規模別に集客をみると以下のとおりである。

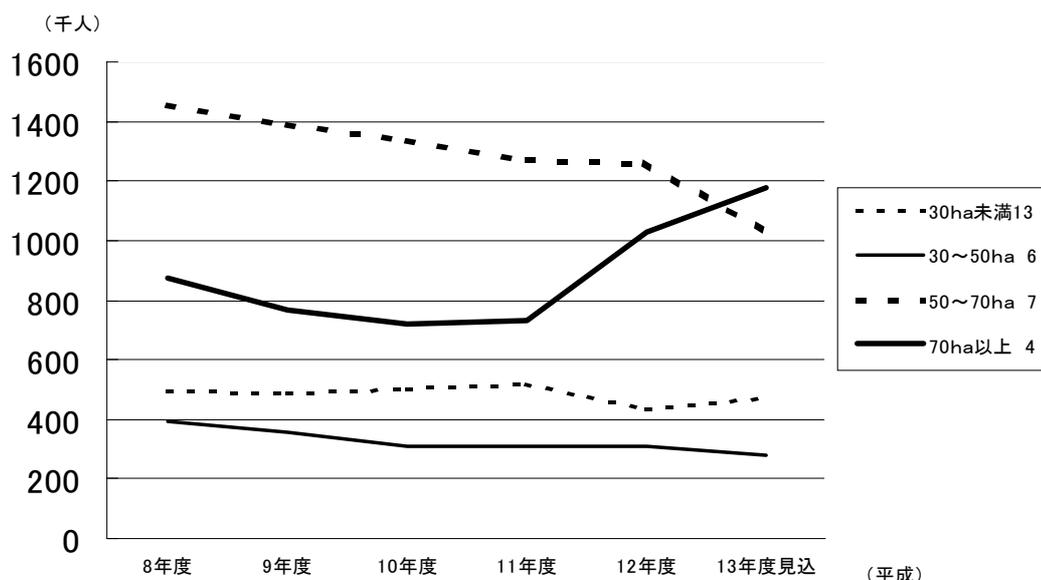
まず、経営母体別に集客数の推移をみると、第3セクター経営のスキー場が大幅な集客の伸びを見せている。これは、平成10年度に2施設、平成12年度に1施設が新たに開設され、特に後者の集客が大きかったためである。また、第3セクター以外は集客数を減少させているが傾向があるが、中でも市町村営のスキー場がこの数年で集客を落としていることが見受けられる。

経営母体別年間集客数推移



また、規模別に年間集客数の推移を見た場合、規模別の特徴としては面積規模70ha以上のスキー場が平成12年度、13年度見込みと大きく集客を伸ばしているが、これは12年度に開設された施設の影響である。また、30ha～50ha及び50ha～70haの面積規模のスキー場が大きく集客を減らしているのに対し、それよりも30ha未満のスキー場が健闘していると言える。

面積規模別年間集客数推移



(4) 市場としての関東圏の捉え方

関東を商圏としていかに捉えるかは、意見が分かれている。

まず、多数の意見としては、関東甲信越方面からの来場者に期待できないというのが、関係者一般の声である。安房峠貫通により高山への観光客が増加したことは広く知られているが、この現象がスキー場には必ずしも当てはまらない。

高山への観光客は、ただ単に観光名所を目指している訳ではなく、「小京都・飛騨高山」を目指しているのであり、他のどこでもない岐阜県の高山市を目指している。

一般スキー客は、特にそのスキー場に行きたいわけではなく、楽しめるどこかのスキー場を目指しているのである。首都圏のスキーヤーが西方向にスキー場を臨んだだけでも、志賀方面、白樺湖周辺、御嶽の山麓、そして白馬方面と、質量ともに豊富である。

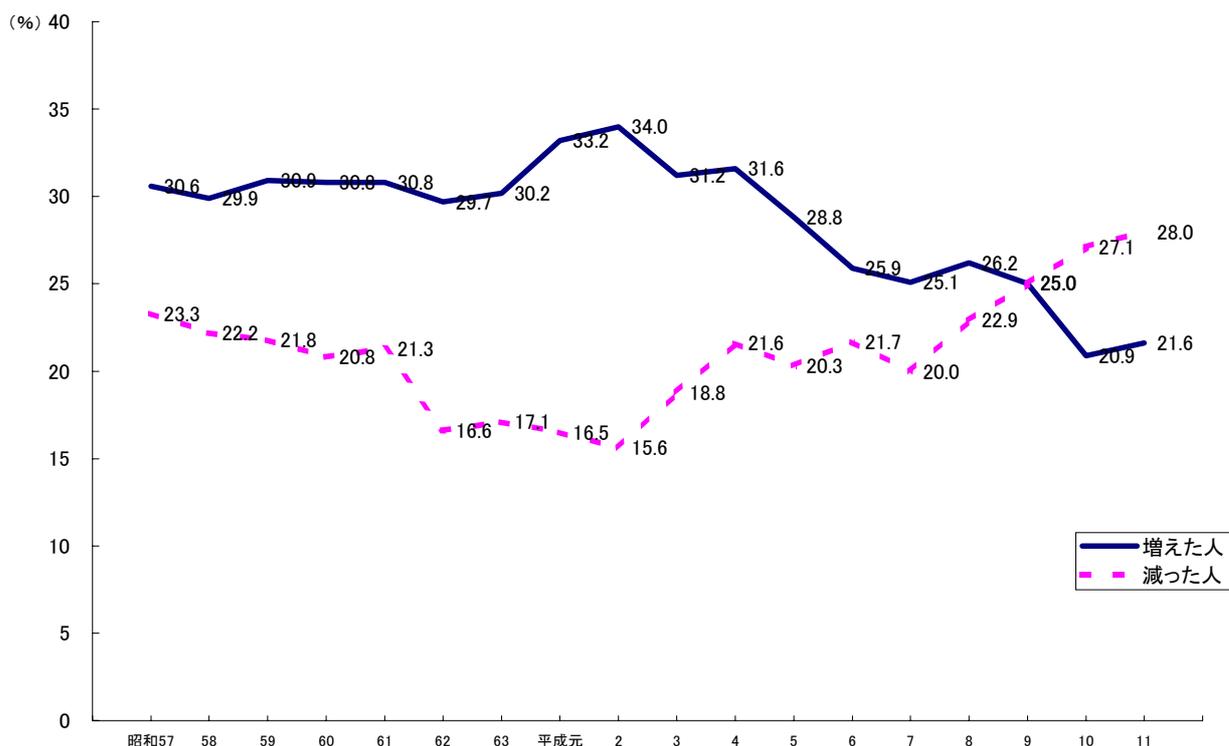
よって一般的には地理的条件から考えて、岐阜県のスキー場はマーケットとしては中京圏、関西圏に絞られるということになるであろう。

一方、修学旅行を誘致しているスキー場では関東・首都圏をマーケットとして積極的に対応すべきであると考えている。その理由はまず、的が豊富である分、撃てば当たる可能性が高いということ、さらに旅行会社とうまく提携すれば、関西からのバス乗車時間とさほど変わらないということ、客単価が比較的高いことなどが挙げられている。

5. ウィンタースポーツ人口自体の減少傾向について

長引く不況の中、余暇に割かれる費用については、いわゆる平成バブル景気に沸いたころ以降、増えた人の割合が減少傾向をたどっており、平成9年以降は減った人の割合が増えた人の割合を上回っている。

余暇支出の推移



(財)余暇開発センター編 「レジャー白書2000」より

こうした背景を受け、年々ウィンタースポーツ人口も減少の一途をたどっている。

スキー場関係者に曰く、特にファミリーでの利用に関しては不況の影響によりリピート回数が激減したと指摘されている。また20代の若い層を中心に車中泊、コンビニエンスストアの弁当の利用ということで、スキーを出来るだけ安く楽しもうという傾向があり、このため極端な言い方をすれば、スキー場内の施設に落ちるお金はリフト券のみとなった。

これは最近のレジャーの傾向である「安・近・短」(安い旅費、近い距離、短い期間)をそのまま反映しており、客単価が低下する傾向にあるなか、利用回数も減少して、さらに完全にウィンタースポーツから脱退する人々が増えていることを考えると、スキー場産業を取り巻く環境は厳しい。

余暇活動の参加率・回数・費用の推移

	参加率								
	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年
スキー	16.6	17.0	17.0	15.9	15.8	15.1	12.7	12.9	11.2
スノーボード	-	-	-	-	-	-	3.1	4.0	3.8

	年間平均活動回数(回)								
	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年
スキー	6.5	5.8	6.5	4.7	5.6	5.5	4.7	4.5	4.3
スノーボード	-	-	-	-	-	-	9.0	8.1	5.9

	年間平均費用(千円)								
	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年
スキー	116.8	109.5	111.7	101.3	100.3	109.6	81.0	71.8	73.9
スノーボード	-	-	-	-	-	-	89.1	90.9	70.0

(財)余暇開発センター編「レジャー白書2000」より

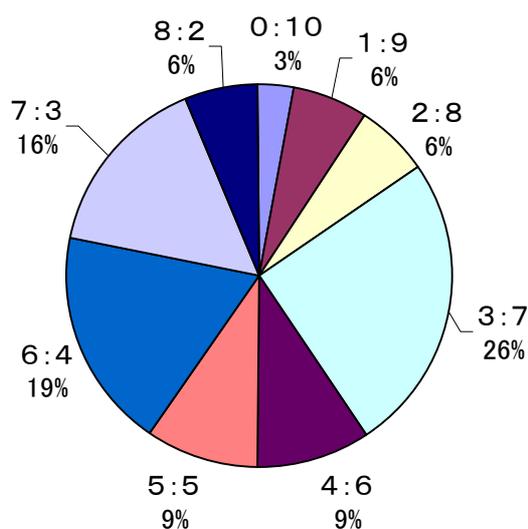
最近のスキー場需要の減少について、不況の影響もさることながら、娯楽の多様化、支出構造の多様化が大きく影響しているのではないかとスキー場関係者は考えている。特にスキー場の利用者のターゲットとして大きなウエイトを占めるのは、20才代の層であるが、この世代が携帯電話を一人一台所有するようになり、その毎月の支出だけでシーズン1回、2回分の来場回数が減っているのではないかと懸念している。

6. スノーボーダーの増加とウインタースポーツの多様化

(1) スキーヤーとスノーボーダーの割合

最近のスキー場の多数派を占めつつあるのが、スノーボード利用者：スノーボーダーである。スキー場において、スキーヤーが少数派になろうとしている。

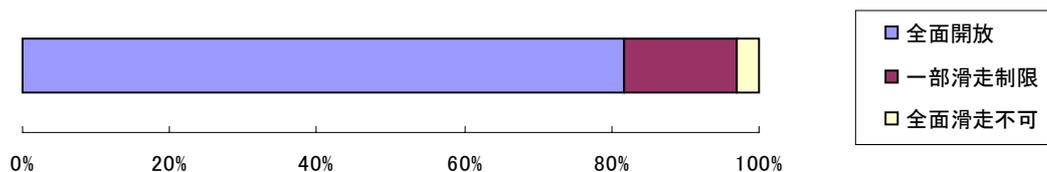
岐阜県内各スキー場のレンタルコーナーにおける「スノーボード：スキー」の保有比率



(当センター実施アンケート結果より)

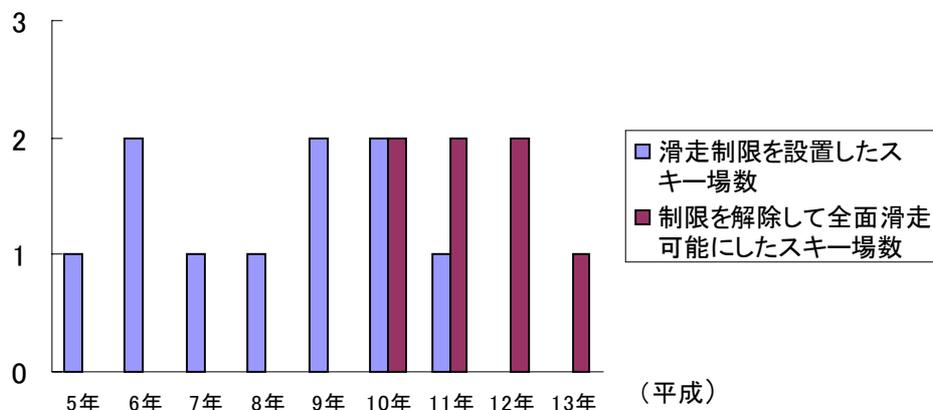
こうしたことから、当初スノーボーダーのスキー場利用を制限していたスキー場も次第に部分開放から、全面開放へと進んできた。すなわちスキー場の中にはスノーボードの滑走全面禁止を唱っていたが、スノーボーダーから、多数派であるはずの自分たちが何故規制されるのかという声があったことや、スキー場の中にはスノーボーダーに解放したところ、一気に入り込み客数を増やしたところもあって、スノーボーダーへの全面開放が進み、この結果、スノーボーダーの滑走を全面禁止しているスキー場や、一部制限を設けているスキー場はわずかとなった。

岐阜県内各スキー場のスノーボードの滑走解放状況



(当センター実施アンケート結果より)

スノーボードの滑走制限と解放の推移



(当センター実施アンケート結果より)

(2) カービングスキー、ファンスキーの登場でスキーヤーの割合減少に歯止め

カービングスキー、ファンスキーの登場でウインタースポーツをする人口に占めるスキーヤーの割合の減少に歯止めがかかりつつある。

カービングスキー・・・従来のスキーより短めで、サイドカーブがきついため、板がしなりやすく板のくびれに沿って容易にターンができるようになっているスキー。

ファンスキー・・・短いレジャー用スキー板の総称。あるいは、カービングスキーの中でもサイドカットが最もきつくおよそ1メートル以内のストックを使わずに楽しめるスキー。

(「現代用語の基礎知識2001年版」, 「情報・知識 imidas2001」より抜粋)

関係者の発言によれば、その原因として下記のようなものが考えられている。

手軽さという点では、スノーボードよりファンスキーに軍配があがったのではないかと。若い世代にとってもスノーボードに劣らないファッション性が評価されたようである。

スノーボードはある程度まではすぐ上達するが、その先が大きな壁となってなかなか上達しないため、敬遠され始めている。回数を踏めば踏むほどに、それに比例してレベルアップがなされていくスキーに人気に戻りつつあるのではないかと。

以前のスキーに比べ、鋭いターンやまわりやすさの性能が高いカービングスキーや、ジャンプやトリッキーな動きが容易なファンスキーに人気が集まったのではないかと。

スノーボードが登場したばかりのブームの当初は、技量の差がなかったが、現状はそ

れが現れ始め、ただ単にスノーボードを手にスキー場に通うだけでは流行に追いついて
いるとは言えなくなった。

体力的にスノーボードを振り回すのは、30才代までで、それ以上の年齢層にはスノ
ーボードは体力的に厳しいものがある。

(3) 多様なウインタースポーツ・リゾートへの取組

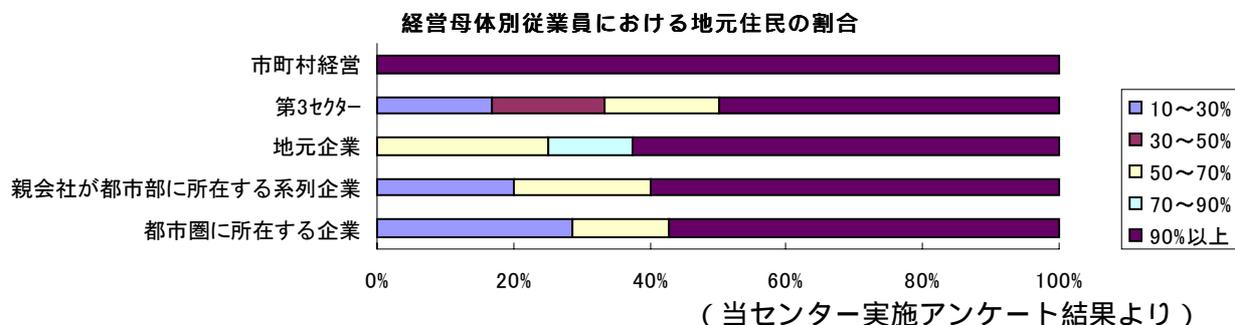
いずれにしても、前章で見たように、景気の低迷や、ウインタースポーツ人口の減少す
るなか、スキー場はスキー、スノーボードにこだわらず次に示すように多様なウインタ
ースポーツ・リゾートへと取組み、その集客の増加に努めている。

県内スキー場においても、長野オリンピックで話題となったモーグルのコース設置をす
るスキー場が多数あらわれた。また、郡上郡北部の一部スキー場では、スノーモービル・
コースを設置して多様化を進めている例もある。

その他、スノースクート（自転車の車輪の代わりに短い2枚のスノーボードがついた乗
り物）、スノーシュー（かんじき風の雪上歩行用具）等新種競技・商品の登場を受け、それ
らのレンタルを行うスキー場もあり、それぞれのスキー場において、総合的なウインタ
ースポーツ・リゾートへの取組が始まっている。

7. 地域社会との関係

(1) 第3セクター・市町村営のスキー場と地元住民の雇用



市長村営あるいは、第3セクターが経営するスキー場については、地元住民の被雇用者が9割を越えるところが多数である。年間を通じてホテル経営をされていてホテル・スキー場一体型の所、夏期はゴルフ場を運営している所、農閑期の農業・林業従事者を雇用している所など、いずれもスキー場が過疎地域において重要な雇用の場となっている。

(2) 町村の観光の目玉

特に、過疎化の進む町村では、スキー場はなんといっても冬の観光の目玉であり、町村の観光パンフレットでも必ず触れてある施設である。そのために「地域間競争ということなら、自治体を上げて協力・支援すべきではないか(スキー場関係者)」という声もあった。例えば、アクセスの問題については、国道へのアクセス道路での渋滞、高速道路での渋滞を経験すれば、そのスキー場へは2度とこないだろう。これへの対処としてアクセスの改善を個々の自治体が働きかけるべきではないかということである。

スキー場をスキーヤーが利用することによる経済波及効果は、当然スキー場との往復に利用される道路沿線を中心にもたらされる。また、宿泊施設経営者には、スキー場利用者の増減が直接影響するのである。したがって、町村にとってスキー場の経済波及効果は決して小さくはない。

(3) 冬季期間の生活道路の渋滞

一方、スキーシーズンの土日、祝祭日は、東海北陸自動車道ばかりでなく、美並村 - 高鷲までの一般国道の156号沿線、白鳥町内の県道石徹白前谷線、揖斐郡内の国道303号からゲレンデへのアクセス道についても、渋滞が発生する。これらは迂回路の存在しない地元民の生活道でもある。このため冬季の特に土日、祝日にこれら沿線住民は外出を控えざるをえないという声もある。

このようにスキー場は、町村に経済効果をもたらす観光施設であるが、住民の生活道を奪う存在であるという反面を持っている。

8. 労働力であり顧客であるフリーターという存在について

(1) 期間労働力の担い手

現在、スキー場においては、高齢者に混じって若年層の働き手が目立っている。彼らは地元の住民である場合もあるが、多くは中京圏・関西圏のフリーターである。学生のアルバイトはこの1月、2月の時期は試験期間であるため、全く期待薄である。また、このウインターシーズンだけ、スキー場の運営に従事してくれる人材は、他に生業をもった人である場合、得難いものとなる。そこで重宝されるのが、フリーターという労働力の供給形態である。

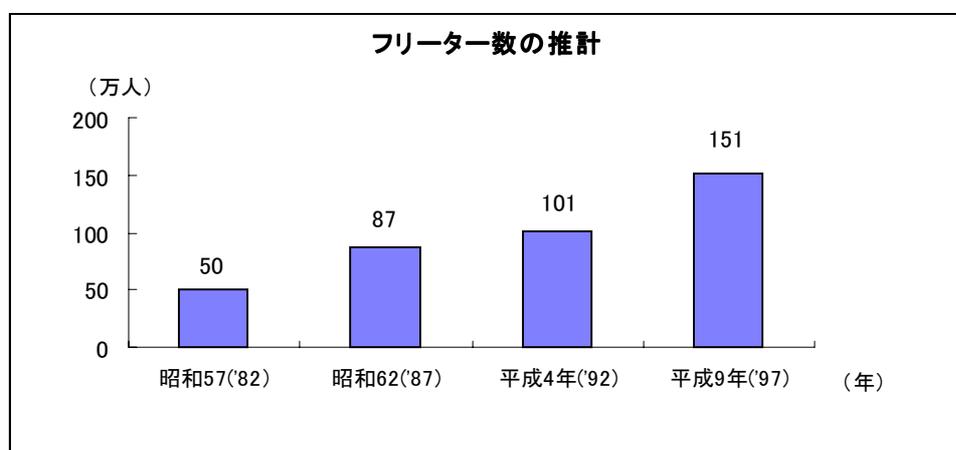
フリーターを多く採用するスキー場では、秋口より中京圏・関西圏において面接を実施し、シーズン中はこれらフリーターを収容する最大で100人規模の寮をスキー場の近くに設置している。

フリーターの側も、例えば北海道のスキー場と岐阜県のスキー場を天秤に掛け、待遇・条件等から判断して冬季の勤め先を選択している。

(2) 主要なマーケット層

今回のアンケート調査においては、各スキー場の主要顧客層について、「ファミリー」「カップル」「学生」という区分で質問したが、その区分自体がもう既に過去のものになりつつあるという指摘を各スキー場関係者から受けた。このような区分ではなく、年齢層別に質問するべきだという声が圧倒的であった。

そして、年齢区分の中でスキー場が主要ターゲットにしているのが、20代や30代前半層であるが、不況による雇用の低迷や、若者の価値観の変化により、この年齢層においてフリーターの存在が大きくクローズアップされている。「平成12年度版労働白書」(労働省編)によれば、年齢15～34歳のフリーター人口は平成9年において151万人とされており、昭和57年が50万人から15年間で約3倍あまりに増加しているとのことである。



資料「平成12年度版労働白書」より (年齢は15歳から34歳に限定)

フリーターは、賃金の絶対額は少ないものの、可処分所得が多く、平日に休日を取ることとできるため、主要なマーケットにもなりえると思われる。そしてこの職種帯が年々増加しているのであるから、スキー場産業としては見逃せない存在だと思われる。

以前は少数派であり、つかみどころがないと思えるこのフリーターと言われる層が、労働力としてだけでなく、マーケットとして明確に意識されるようになっていくと思うのである。

9. 今後の課題

これまで岐阜県のスキー場について取り上げ、調査等に基づき、現状の分析を行ってきたが、その中から、岐阜県のスキー場が抱える主な課題を考えると次のとおりである。

(1) 新しい消費者の志向、消費構造の変化にどう対応するか

景気低迷のなか、客単価、リピート数とも落ちる一方である。一方、従来のファミリー層とは別にフリーターというマーケットが顕在化してきている。スキー需要の減少に対して、ただ単に、ウィンタースポーツ人口が減少したためだとか、少子化のためだとか、不景気のためだというふうにするのではなく、こうした消費者の変化にいかに対応していくか前向きに考えていくことが必要である。

(2) 「スキー場群」としての集客をいかに図るか

岐阜へたどり着けば、当初希望のスキー場へは、駐車場が満車で入場できなくとも、どこかのスキー場に入り込める、そうした環境作りが必要であると思われる。スキー場群として利用者が選択の余地を多様にしておくことが必要である。そのためには県下スキー場全体がどう取り組まなければならないのかを、検討する必要がある。

(3) 渋滞緩和をいかに図るか

東海北陸自動車道の渋滞、連絡する国道・県道の渋滞を緩和するか、またスキー場自体の駐車場が早朝より満車となることへの対応をどうするかが、大きな問題であると言える。今回の調査において各スキー場関係者から聞こえてきた基盤整備に関する課題として、最も多かったのが、道路の問題である。

一度、「あのスキー場へ行くと渋滞に遭う」というイメージが定着すると、それを払拭するには、相当の期間が必要となるそうである。岐阜のスキー場は行き帰り渋滞するというイメージが定着するなら、現在好況のスキー場も含め、一応にダメージを受けることになろう。

10. 今後の展開

(1) 携帯電話掲示サイトでスキー場情報を発信

現在でも、スキー場、町村の観光協会は、ロードサイドの看板、電光掲示板、テレホンサービス、FAX通信、ホームページ、携帯電話情報サイトで個々のスキー場情報の提供を行っているが、今後は特に携帯電話によるスキー場情報の提供が重要性を高められる。携帯電話の文字情報サービスによるゲレンデ最新情報の提供を県内各スキー場についての詳細情報を配信するのが先に述べた課題の打開策の一つと考える。

スキー場情報といえば、その日毎の積雪状況を知らせるのが一般的であるが、これを一歩進め、刻々と変化するスキー場の駐車場の空き状況と今後の満車に到達する時刻の予定等を、携帯電話の文字情報サービスで知らせるようにする訳である。

多くの若者が携帯電話を保有していることから車で来場するスキーヤーに対しては、携帯電話が威力を発揮すると思われる。実際来場者が殺到し、駐車場整理がパンク状態に陥いるスキー場があり、例えば、マイカーでの利用者で東海北陸自動車道を北上してきた場合、別のスキー場を探すことになる。その時、例えば郡上郡白鳥町のスキー場でも見つからず、高鷲村のスキー場でも見つからず、大野郡荘川村のスキー場でも見つからず、その後国道41号沿いのスキー場にたどり着くというケースがあるそうである。ドライバーにとっても、当然大きな時間的ロスを生んでいるのだが、受け入れるスキー場にとっても駐車場が満車になってスキーヤーを受け入れられない状況は、「利用者が多数となる恩恵以上に、その対応に追われるだけでなく来場者に悪い印象を残す(郡上北部のスキー場関係者)」ことになる。

(2) 携帯電話情報サイト構築のための可能性

この駐車場問題に対応するため、携帯電話を情報源として利用できるようにするためには、刻々と変化する駐車場の状況を逐次配信するサイトに入力しなければならないが、はたしてこのようなサービスは人件費等のコストから考えて達成が可能なのだろうか。

ところが、一部観光協会では、24時間体制で地区内のスキー場の駐車場の情報を高速道路サービスエリアの電光掲示板に表示したり、地区内の幹線沿いコンビニエンスストアに向け発信しているそうである。

他方、一部のスキー場では、ホームページ、携帯電話による情報サイトの内容充実に努め、「本日のゲレンデ情報」として日々変化する積雪状況等を掲載しているし、「岐阜県スキー場連盟協議会」も既に、各スキー場の情報をとりまとめたホームページ、携帯電話による情報サイトを開設して毎日情報を更新している。

こうした動きを一本化し、スキー場群としてスキーヤーに情報提供を行い、スキーヤーがたくさんスキー場の中から、当日利用するスキー場を決定できるようにすることが考えられる。つまり都市部を深夜マイカーにて出発した利用者が、携帯電話を使って、到着

時刻ぎりぎりまで当日の利用の場を選択できる状況を作り出すのである。

あるいは、車での移動中に情報を取得するという事なら、カーナビゲーション・システムの情報に刻々と変化するスキー場情報を表示することも有効であると考えられる。現在のカーナビでもスキー場の営業時間、リフト料金、駐車場台数・料金までは知ることができているが、駐車場混雑の状況までは知ることができない。

(3) スキー場の差別化

あらゆる業種にいえることではあるが、近隣のスキー場との競争面からは、他のスキー場との差別化を図ることが必要であり、そのためには、既に存在する自らの独自性を発見し、それに力点を置いたアピールを行う必要があるのではないかと考える。

もちろん、今回の調査においても、各スキー場において様々な取組がなされていたり、他のスキー場と比較して特異と思われる部分があるスキー場が幾つか見られた。以下はその具体例である。

子供用のそり滑りのために、トロッコを設置(郡上南部：大和町：母袋温泉スキー場)
各スキー場がスノーボーダー用のコース設定、リフト設置をする中で、子供向けの装備を有するのは、特異であると言える。

2日券を5,500円で販売(飛騨北部：神岡町：飛騨流葉スキー場)
同一のスキー場で2日間続けてスキーを楽しむとなれば、それなりの規模が必要となるが、県内スキー場において50ha以上のスキー場で、通常価格で上記値段であるのは、他と比較して割安と考えられる。

金曜日レディース・デイ(女性リフト割引日)を設定(西濃：坂内村・久瀬村：揖斐高原スキー場・揖斐高原貝月スキー場)
他のスキー場がレディース・デイ等のサービスデイを水曜日に設定する中、金曜日にそれを設けているのは希である。ただし、広告に工夫の余地があると思われる。同スキー場に取材に行った際にも、女性がリフト券を購入して初めて、サービスデイであることに気づいたという場面を何度も見かけた。

平日にナイター営業を実施(西濃：春日村：春日長者平スキー場)
県下のスキー場においてナイター営業を行うスキー場、特に平日のナイター営業を行うスキー場は少ない。これは日帰りが定着して、コスト的に採算が合わないというのが各スキー場の意見である。そうした中、平日のナイター営業を実施するのはスキー場の差別化として有効だと考えられる。

家族連れにファミリーのリフト券割引を実施（飛騨南部：宮村：モンドウスノーリゾート）

不景気の中、ファミリー・スキーのリピーターは回数が落ちる一方である。また、利用者の声として「家族で来場したのに何故割引がないのかという苦情を聞く場合がある（郡上郡南部スキー場関係者）」ことから、ファミリーの誘致に向け、「大人2枚・子供1枚」あるいは「大人2枚子供2枚」といった構成でリフト優待券を販売している。

シニアリフト券の販売（郡上群北部：明宝村：めいほうスキー場）

リピーター回数は年間で限られているものの、元々資産のある年代層であり、客単価の大きい層であるため、これを多く招くのも一つの手段である。長野県白馬連峰のスキー場ではシニアリフト券を販売するところが多いが、岐阜県下において実施している例は珍しい。

有名プロを校長に招いてスクールを開設（飛騨南部：高根村：チャオ御嶽スキーリゾート）

カリスマ性のある有名プロスノーボーダーをスクールの校長に招き、各スキー場にあるスノーボードスクールとの差別化を図る。

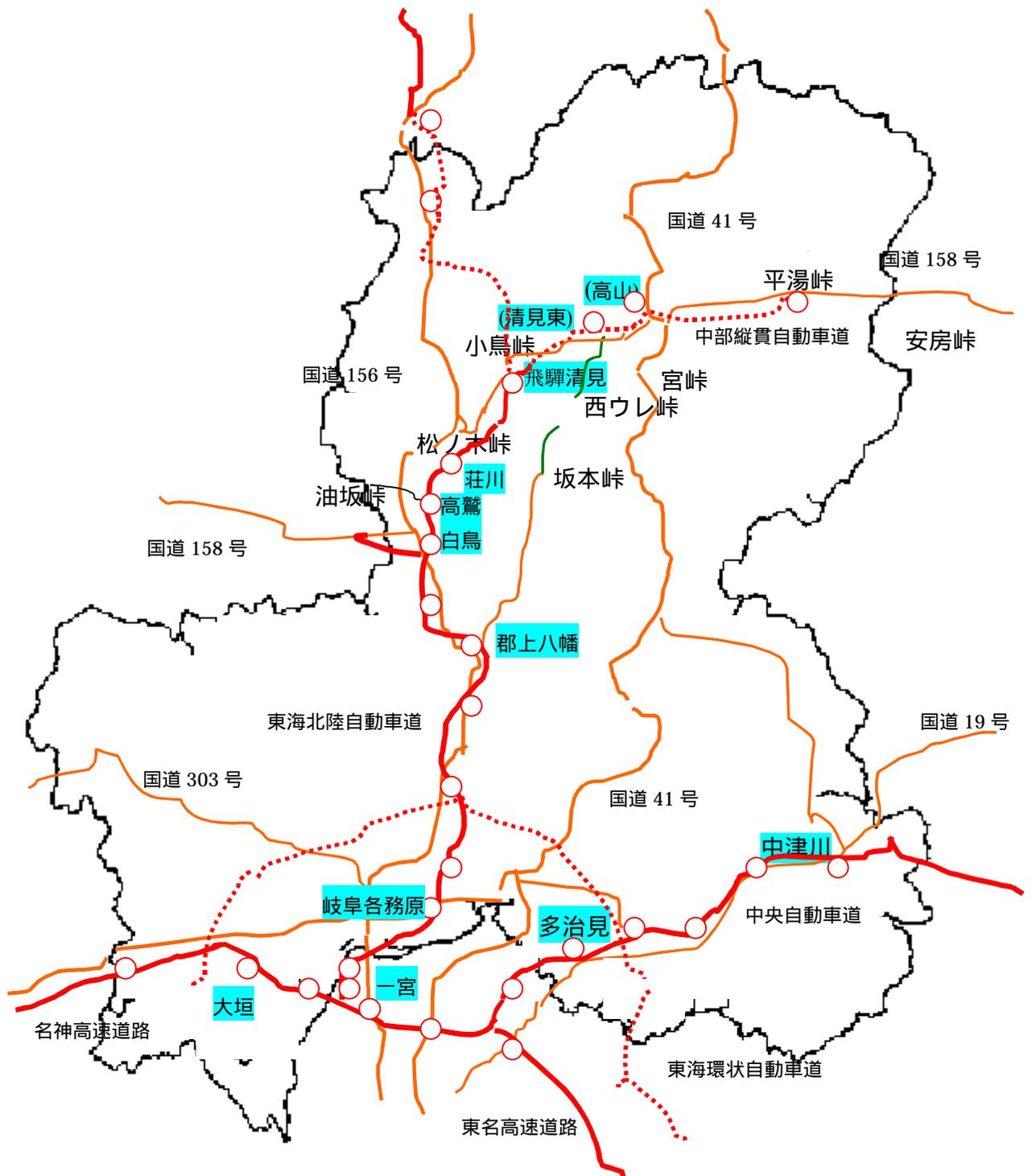
上記のポイントについては、既に個々のスキー場において試みられていることではあるが、アピール不足で、広く知られていないものが多い。また、比較分析の上、浮かび上がってくる部分もあり、当のスキー場自身も気づいていないのではないと思われるものがある。こうした個性的な部分というのは、実はどのスキー場でも存在するのであって、例え小規模でかつアクセスが悪いスキー場においても、必ず他と差別化できる要素があると思われる。したがって各スキー場はそれぞれの特徴を生かしたり、作ったりすることによって利用者にアピールすることが必要である。

（４）県側から岐阜県のイメージアップ手段としての後押し

各スキー場を取材する中で、各スキー場が宣伝上苦戦する理由として、東京・大阪でのキャンペーンで自分のスキー場の位置を理解してもらう前に、「岐阜県がどこにあるか」理解されていない点がある。高山市がどこにあるかわかって、岐阜県が理解されていないという実状がある。自然に恵まれた当県をアピールする上で、スキー場は格好の材料ではないだろうか。スキー場と協力しつつ県が岐阜県のスキー場の良さをより一層積極的にPRすることが期待される。

（５）東海北陸自動車道の早期4車線化

東海北陸自動車道の渋滞については前にも述べたが、高速道路料金を払っているにもかかわらず渋滞に遭遇している冬季利用者の不満が、今後の集客数減少に影響しないか、懸



岐 阜 県 内 主 要 幹 線 道

念されている。実際、郡上方面のスキー場利用者からの声で一番多いのが、この渋滞問題であり、ゲレンデ内ではマイカー利用者に対して東海北陸自動車道の渋滞情報を熱心に流している。郡上郡のスキー場関係者によれば、過去に入り込み客の飽和状態を続けていたスキー場が、翌年大きく数字を落とした例があり、「岐阜のスキー場 = 行き帰り渋滞」というレッテルが一度貼られるとそれを覆すには多大な努力を要することになる。奥美濃のスキー場関係者が共通して期待するのが、東海北陸自動車道の早期4車線化である。

こうした状況を踏まえ、現在白鳥インターまでの4車線化が決定しており、美濃 - 白鳥間において、4車線化工事が進められている。

(6) 連絡道路他の整備

一方、自動車道以外の整備についても、状況は深刻である。

ひとつには、スキー場への連絡道路が、住民の生活道路になっている場合である。スキーに関係ない地域住民は、冬季は「自動車による移動を諦め、家に閉じこもっているしかない」といった声もあり、かなり迷惑しているようである。

また、現在冬季使用不可となっている道路について改善を加え、関西圏とのアクセスを多様化すべきという意見がスキー場関係者から聞かれた。

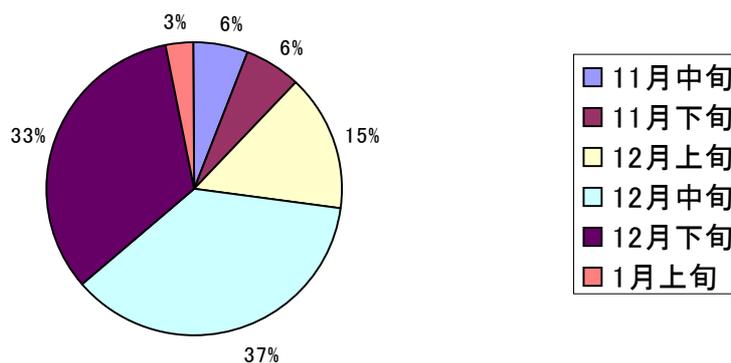
例として、県としても改善を進めているところではあるが、揖斐郡坂内村から滋賀県木之本町に抜ける国道303号、郡上郡白鳥町石徹白地区から福井県和泉村に抜け、国道158号に通じる県道白山中居神社朝日線等について期待が寄せられていた。

11. アンケート分析結果

以下は巻末のアンケートによる分析結果である。

(1) オープン時期

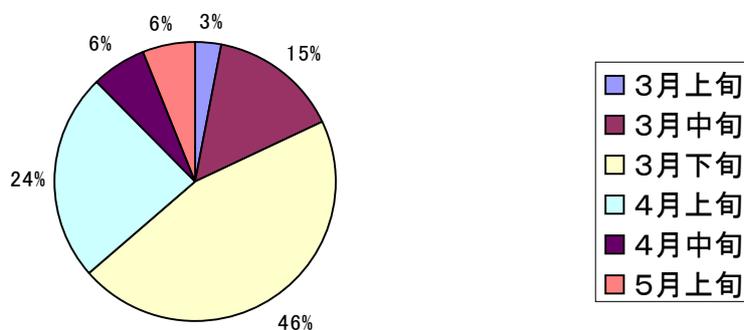
各スキー場のオープン時期



ここ数年は、暖冬が続いており、シーズンスタート時期が遅れる傾向にある。又、11月中旬オープンするスキー場については、人工造雪機（アイス・クラッシュ・システム：氷点下で水を噴霧して雪を降らす従来の人工降雪機とは違い、氷を作りそれを降らせる装置）を装備している。

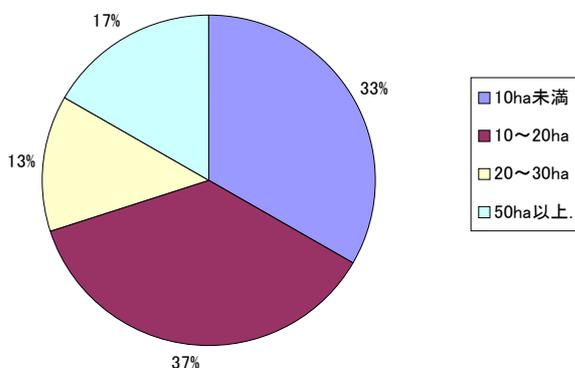
(2) クローズ時期

各スキー場のクローズ時期



(3) 圧雪車一台あたりの滑走面積 (ha/台)

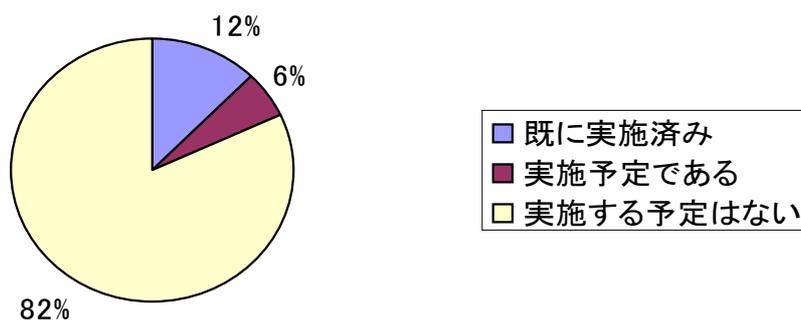
圧雪車1台あたりのスキー場内滑走面積



現在、各スキー場では、モーグルコース(コブが密集した急斜面を滑ったり、途中ジャンプするコース)を意識的に残しているため、圧雪車のカバーする面積が広いからといって一律に機械化が進んでいるとはいえない。ただし、滑走面積70ha以上のスキー場のうち6割は、圧雪車1台あたりの滑走面積が13ha前後と低く抑えられ、集客の状況も良好である。

(4) リフト券のICカード化状況

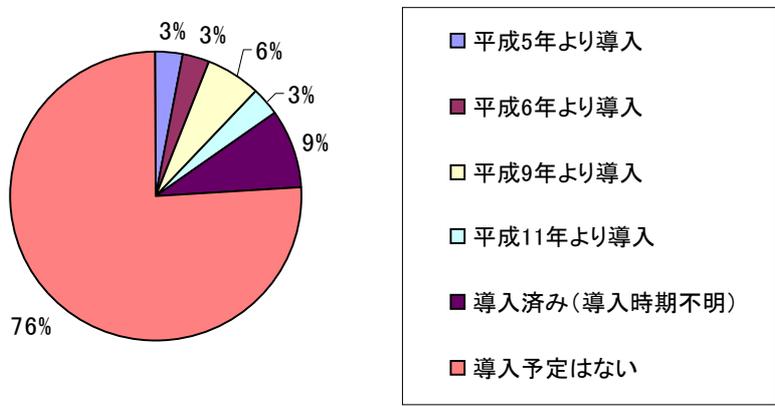
リフト改札のフリーゲート化



リフト券をICカード化して、リフトの改札を無人改札化している、あるいは予定しているスキー場は、現在のところ少ない。ICカード化すれば、入り込み客数の容易な判定、時間帯別の各リフトの混雑状況把握、人件費の削減等の効果があるそうである。ただし、導入費用は大きく、県内のスキー場では見送られている。

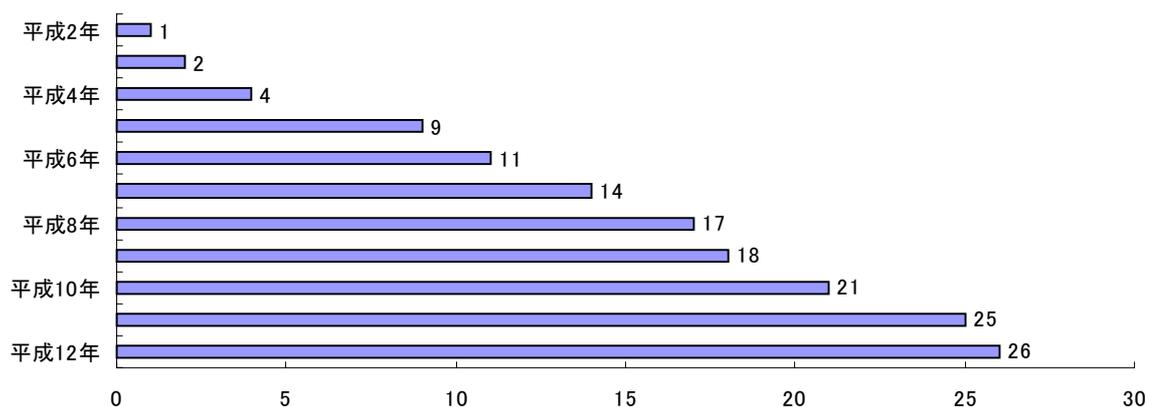
(5) リフト券に入場料保険料を含む割合

リフト券にスキー場入場者保険料を含むスキー場の割合



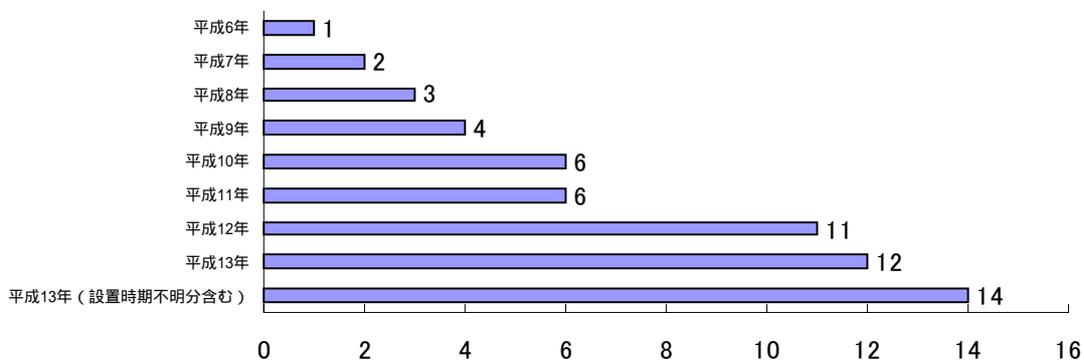
(6) スノーボードのレンタルコーナーでの設置状況

レンタルコーナーでのスノーボード設置スキー場数

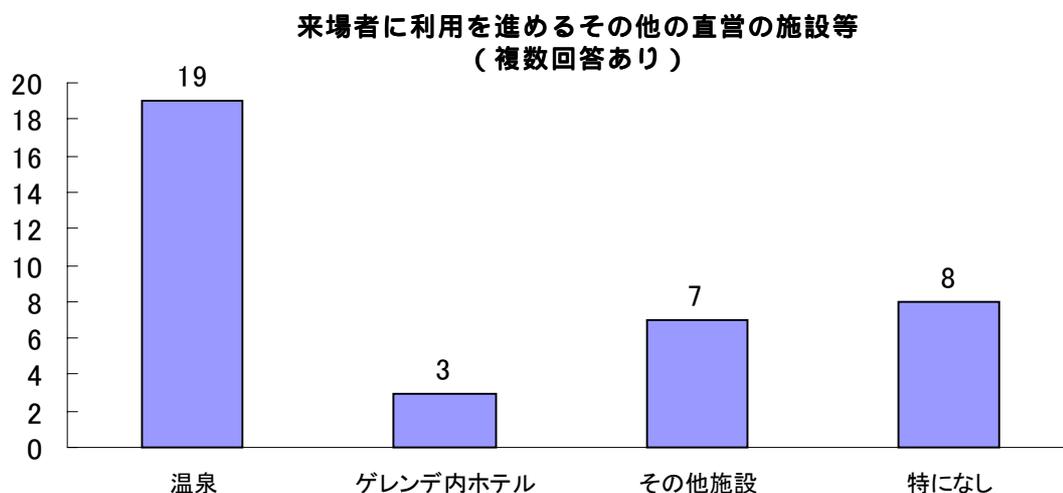


(7) スノーボード用コース設定状況

スノーボード用コースの設置スキー場数

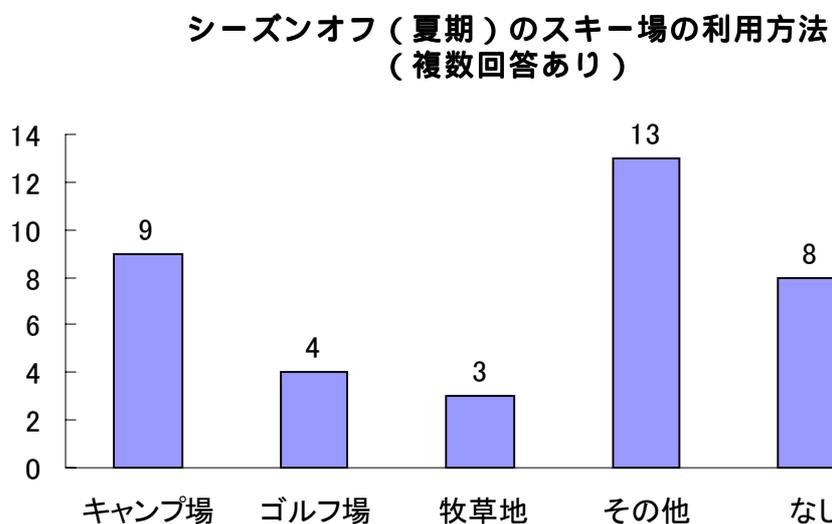


(8) スキー場利用に伴い利用を勧める施設



アフター・スキーに温泉という利用のしかたが一般的になったそうである。よって各スキー場とも敷地内に温泉を設ける他、近くのスキー場とのタイアップを図っているそうである。

(9) シーズンオフの利用方法



多くのスキー場では、シーズンオフのスキー場の使用方法については、良いアイデアがないそうである。また、上記「その他」の中では、ハングライダー場、サマースキー場、野外コンサート会場等がある。

県内冬季観光施設（スキー場）実態アンケート

（該当する番号に をしていただく他、各項目に記入して下さい）

スキー場の現状・概要について、お尋ねします。

1. 当スキー場の正式名称をお教え下さい。

--

2. 当スキー場は、最近10年間のうちにC I（企業目標・イメージを定着させるための名称変更）により名称を変更した場合は、名称変更時期と旧名称をお答え下さい。

平成	年	月より新名称。	旧名称
----	---	---------	-----

3. 当スキー場はいつごろ開設されましたか。上記2. をお答えになった場合は、旧名称のスキー場が開設された時期をお答え下さい。

大正・昭和・平成	年	月	開設
----------	---	---	----

4. 当スキー場のオープン時期は毎年いつごろですか。

11月中旬	11月下旬	12月上旬	12月中旬	12月下旬	1月上旬
その他（ 月 旬 ）					

5. 当スキー場の終了時期はいつごろですか。

3月上旬	3月中旬	3月下旬	4月上旬	4月中旬	4月下旬
5月上旬 その他（ 月 旬 ）					

6. オープン後、滑走が全面不可となる日はシーズン中の約何%ありますか。

0%	1%	3%	5%	7%	10%
その他（ ）					

7. 当スキー場の全滑走面積は、約何平方メートルどのくらいですか。

約	m ²
---	----------------

8. 人口降雪機で滑走可能にできる面積は約何平方メートルどのくらいですか。

約	m ²
---	----------------

9. 当スキー場の営業時間（リフト運行時間）をお答え下さい。

早朝営業時間帯	:	AM	~	:	AM	(曜日早朝)
通常営業時間帯	:	AM	~	:	PM		
ナイター営業時間帯	:	PM	~	:	PM	(曜日夜間)

10. 当スキー場の圧雪車両の数は何台ですか。

台

11. リフト券のICカード化（スキーゲートシステム）は実施されていますか。実施済み・実施予定の場合はその時期をお答え下さい。

実施済みである。（ _____ 年度から実施済みである）
実施予定である。（ _____ 年度から実施予定である）
実施予定はない。

12. リフト券の代金にスキー場入場者保険料は、含まれていますか。既に含まれている場合、予定されている場合はその時期をお答え下さい。

既に含まれている。（ _____ 年度から含まれている）
含む予定である。（ _____ 年度から含む予定である）
含む予定はない。

13. リフト券はどういった種類のものが発行されていて、発行枚数全体の中でどれだけの割合を占めていますか。

1日券 _____ %	半日券 _____ %	2日券 _____ %	3日券 _____ %
回数券 _____ %	1回券 _____ %	シーズン券 _____ %	時間券 _____ %
その他（ _____ ）			

14. 当スキー場の主にターゲットしている顧客層はどれですか。重視する順番を5番までを教えてください。

ファミリー _____ 番目	カップル _____ 番目	幼児 _____ 番目
児童生徒（小学生～高校生） _____ 番目	学生（大学生等） _____ 番目	
団体（修学旅行、社内旅行等） _____ 番目	競技者 _____ 番目	
その他（ _____ ）		

スノーボードへの対応について、お尋ねします。

15. スノーボードについては滑走制限をされていますか。

当初より制限を設けていない。
当初は制限を設けていたが現在全面滑走可とした。 (当初条件 1) 平成_____年度より土日祝日の滑走制限をした。 2) 平成_____年度よりコースにより滑走制限をした。)
ただし、平成_____年度より全面滑走可とした。
現在一部制限をしている。 (現在の条件 1) 平成_____年度より土日祝日の滑走制限をしている。 2) 平成_____年度よりコースにより滑走制限をしている。)
その他 (_____)

16. 当スキー場ではスノーボード用のコース設置をされていますか。あるいは設置予定ですか。設置済み、設置予定の場合その時期をお知らせ下さい。

設置済みである。 平成_____年度より設置している。
設置予定である。 平成_____年度より設置予定である。
その他 (_____)

17. レンタルコーナーでスノーボードを常備するようになったのはいつごろですか。

平成_____年度より常備

18. レンタルコーナーにおけるスノーボードとスキーの割合は、どれほどですか。

スノーボード：スキーの割合は
1：9 2：8 3：7 4：6 5：5 6：4 7：3
8：2 9：1 スノーボード滑走禁止

19. スキースクールにおいてスノーボードのコーチは常駐していますか。常駐している場合は、土日祝日で何名ほど常駐していますか。

常駐している。 土日祝日で_____名 常駐している。
今後常駐させる予定である。 平成_____年度より常駐させる予定である。
今後常駐させる等の対応は考えていない。

スキー場の運営状況等について、お尋ねします。

20. 当スキー場の最近5年間の入場者数および13年の見込みをお教え下さい。

平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年見込み
千人	千人	千人	千人	千人	千人

21. 当スキー場の入場者数について最近5年間の各1月分についてお答え下さい。

平成8年1月	平成9年1月	平成10年1月	平成11年1月	平成12年1月	平成13年1月
千人	千人	千人	千人	千人	千人

22. 当スキー場の来場者はそれぞれの方面からの来場ですか。下記方面ごとに%でお答え下さい。

周辺市町村 _____ %	岐阜市周辺部 _____ %	愛知県 _____ %	関西方面 _____ %
北陸方面 _____ %	関東甲信越方面 _____ %		
その他 (_____ %、 _____ %、 _____ %)			

23. 当スキー場の経営主体は下記のうちどれですか。

市町村直営	第3セクター方式	地元の企業
都市圏に本社・系列元を持つ地元の企業	都市圏に所在する企業	
その他 (_____)		

24. スキー場内の従業員(パート・アルバイト含む)のうち地元住民の割合は以下のうちどれですか。

10%未満	10~20%	20~30%	30~40%	40~50%
50~60%	60~70%	70~80%	80~90%	90%以上
その他 (_____)				

25. スキー場の利用に伴い、来場者に利用を勧めているその他の経営している、あるいは関連する施設としては、以下の中で何がありますか。

温泉、	その他の観光施設 (_____)
地元の商業施設等 (_____)	
その他 (_____)	

26. シーズンオフの当スキー場の利用方法としては下記のうちどのようなものがありますか。

キャンプ場、	サマースキー場、	ゴルフ場
その他 (_____)		

・経営施策および今後の展望についてお尋ねします。

27．東海北陸自動車道の延長と当スキー場の入場者数への影響についてはどのように考えてお見えですか。

28．今後、東海北陸自動車道の富山県への接続、さらには中部縦貫自動車道・東海環状自動車道の整備がなされた場合、当スキー場への集客の影響は、どのようになるとお考えですか。

29．最近5年に新設された集客のための手段・施策としてはいかなるものがありますか。

(例：女性サービスデイの設置、関西地方以西でのキャンペーンの実施等)

30．今後の当スキー場の戦略として、どのようなものをお考えですか(公表できる範囲で結構です)。

(例：リフト・ゴンドラ増設、新ゲレンデ設置等)

31．岐阜県・行政の政策に対して、今後のスキー場経営の観点から期待するもの、希望するものが、ありますか。

(例：東海北陸道自動車道 美濃 - 美並間の早期2車線化等)

3 2 . 御社のご連絡先をお書き下さい (ゴム印でも結構です) 。

郵便番号 〒	-	電話番号	-	-
ご住所		FAX 番号	-	-
E-mail : _____				
会社名 (お名前)				

ご協力ありがとうございました。

(財) 岐阜県産業経済振興センター 情報企画課

〒500-8505 岐阜市藪田南 5-14-53 岐阜県県民ふれあい会館 10 階

Tel (058) 277-1084 Fax (058) 273-5961 E-mail : x x x@gpc.pref.gifu.jp

【参考文献】

「レジャー白書2000（自由時間をデザインする）」

平成12年 4月 （財）余暇開発センター発行 （株）文栄社

「余暇レジャー総合統計年報2000年版」

平成12年 8月 （株）食品流通情報センター発行 （株）港洋社

「第9次 業種貸出審査辞典」

平成11年12月 （社）金融財政事情研究会発行 文唱堂印刷（株）

「スキーリゾート年鑑1996」

平成 7年10月 総合ユニコム（株）発行 （株）小宮山印刷

「スキーマップル'98[全国]」

平成 9年 （株）昭文社発行

「四十年史」

昭和61年11月 岐阜県スキー連盟編 高山印刷（株）

「現代用語の基礎知識2001年版」

平成13年 1月 （株）自由国民社発行

「情報・知識 imidas2001」

平成13年 1月 （株）綜合社編 （株）集英社発行

「平成12年度版労働白書」

平成12年 6月 労働省編 日本労働研究機構発行

「岐阜県スキー場ゲレンデガイド」

平成12年10月 （社）岐阜県観光連盟・岐阜県スキー場連絡協議会発行